

神苑

神苑の決意

つつがなく執り行われた大嘗祭諸儀から考える

令和の御大典と祖宗の制の精神問題

神苑の決意 主筆 木川 智

本号の内容

【主張】令和の御大典と祖宗の制の精神問題 つつがなく執り行われた大嘗祭諸儀から考える（木川智）：1 / 【解説】葦津珍彦は山口二矢による浅沼稻次郎刺殺事件をどう論じたか 非合理なるものへの憧れと、政治とテロとの宿縁（西山徹）：3 / 【連載】アジア放浪記―歴史を掘り起こし日本を見る③（仲村之菊）：5 / 花瑛塾十月・十一月活動報告：8 / お知らせ・編集後記：16

1部 1000円
(別途送料160円)

【主張】 先月、天皇陛下は即位にともなう一世一代の重儀である大嘗祭に臨まれ、十四日から十五日にかけては大嘗祭の大嘗宮の儀、また十六日ならびに十八日と大饗の儀がつつがなく執り行われた。

今年五月の剣璽等承継の儀や即位後朝見の儀はじめ、即位に関する様々な儀式・祭事が執り行われ、十月には即位礼正殿の儀、先月十日には延期となっていた祝賀御列の儀が執り行われたが、いよいよ大嘗祭も滞りなく終えられ、即位礼も主だったものは立皇嗣の礼のみとなった。

大嘗祭の「国民化」と、祭儀の「成長」

大嘗祭の「本義」が何かということについては、歴史的に様々な見解があり、変遷もしている。昭和のお代替わりにおいては、おおむね大嘗祭とは「神皇帰一」といわれるような、神と天皇が一体となる神秘的な祭事と考えられていた。しかし、平成の大嘗祭においては、そうした見解を否定し、新しく即位した天皇が神々に新穀を供進し、また自らも召し

上がり、国と国民の安寧を祈り、五穀豊穰を感謝する祭りといった見解が提起され、議論となったが、このたびの大嘗祭では、そうした平成の大嘗祭の理解がほぼ定着した感がある。

大嘗宮の儀に比べるとあまり話題にならなかったが、大饗の儀も大嘗祭の本義と関連して歴史的な議論がある。例えば明治時代の国学者門脇重綾は、大嘗祭を天皇・国民が天祖からの贈り物である酒饌を飲食する国家的規模の祭典であると理解する。そのため大嘗祭の殿内の親祭、つまり現在の大嘗宮の儀